武上真理子
『科学の人・孫文　思想史的考察』

深町英夫

一

辛亥革命一〇〇周年に当たる二〇一一年には、孫文に関連する著作の出版が日本国内でも相継いだ（評者も時流に乗ったクチである）。それ以後は、安藤久美子『孫文の社会主義思想 中国変革の道』（汲古書院、二〇一三年）と、横山宏章『素顔の孫文 国父になった大ぼら吹き』（岩波書店、二〇一四年）という、ベテラン学者による長年の研究に基づく孫文論が上梓されているものの、来年の孫文生誕一五〇周年までは一休みといった趣である。

日本の中国近代史学界で孫文が流行の研究課題ではなくなってから、すでに四半世紀ほどが過ぎている。いや、孫文のみならず革命家の人物研究そのものに対して、学界の傍流という位置づけがほぼ定着していると言ってよいのではないか。唯一、蔣介石のみはスタンフォード大学フーバー研究所における日記の公開に伴い、日本を含む東アジア各国の学界で研究バブルが続いていたが、それも山田辰雄・松重充浩編『蔣介石研究 政治・戦争・日本』（東方書店、二〇一三年）等の刊行（これには評者も参加しているのだが）を区切りに、どうやら一段落したようだ。

そんな状況下で刊行された本書は、久しぶりに日本の学界に現れた新たな孫文研究者の手になる、従来の研究とは相当に異なった斬新な視点からの孫文論である。これは大いに期待せずにはいられない。

二

本書の構成は、以下の通りである。

はじめに
緒論　孫文思想の見取り図
第一章　孫文の科学観――その原点と到達点
第二章　孫文と医学――『紅十字会救傷第一法』の翻訳と出版
第三章　『実業計画』の同時代的位相――中国経済開発計画の背景とエンジニアたち
第四章　孫文と工学――「太平洋の時代」における上海港
終章　近代科学思想と孫文
補論　孫文と南方熊楠
注
図表一覧
参考文献一覧
初出一覧
あとがき
索引

各章の内容を、以下に略述する。

「はじめに」は、「孫文と科学」という、本書の主題が意味するところを定義する。すなわち、ここでいう「科学」は「科学的社会主義」「科学的発展観」のような政治性を持つ概念ではなく、また狭義の自然科学に限定されるものでもない。それは、「サイエンス」の原義として人文科学・社会科学をも含む「広義の科学」であり、さらには当時「宗教に代わって世界の総体を解釈する普遍的真理の地位を獲得しつつあった」ところの、「非専門家に対しても開かれたポピュラー・サイエンス」をも含む概念であるという。これを端的に言えば、世界観のことであろうと評者は理解する。著者は孫文を、「この時代が多数輩出した、広義の科学に通暁し、それを職業とするよりはむしろ自らの思想と行動を統べる原理とした」人物、すなわち「マン・オブ・サイエンス」の一人として位置づける。そして、彼の科学観の成り立ちと「サイエンス」に発する思想の進化の過程を辿るという、本書の基本的な課題が設定されている。

「緒論　孫文思想の見取り図」は、まず中国大陸・台湾および西洋・日本の孫文研究史を詳細・的確に整理した上で、「孫文の思想それ自体に正面から取り組む研究がやや低調」であることを指摘する。このような現状に対して著者は、「言語的境界を越えて収集された史料が織りなす世界史的視野の中に彼の思想を跡づけ」、さらに「革命家としての孫文の行動とは別の次元から彼の思想形成の歩みに光を当て」ること、すなわち「彼の思想の基層を成す「知」の見取り図の実証的解明」という、新たな視点を提示する。

著者によれば、一九世紀以降に科学の専門化と大衆化が同時に進行する中で出現した、英文のポピュラー・サイエンスの書籍を通じて、孫文は科学知識を吸収することができた。ただし、これは「「俗流科学」へのディレッタント的耽溺を意味するものではなく、むしろ「科学救国」を掲げた新文化運動と同様に、「圧倒的な破壊力と浸透力」を持つ近代科学を擁する西洋文明に接して、中国人知識人が抱いた「啓蒙科学観」の一つの事例であるという。さらに著者は基礎作業として、「孫文思想の見取り図」を伝える重要資料である、上海孫中山故居の蔵書に詳細な分析を加えている。

「第一章　孫文の科学観――その原点と到達点」は、香港西医書院の創立過程と教育内容、そしてこの英中両帝国の辺境／接点において孫文が、「普遍的真理としてのサイエンス」を学んだ経緯を詳細に検証する。後年に孫文は、細胞が知覚を持つと考えてこれを「生元」と呼び、また人類を発明家たる「先知先覚」、宣伝家たる「後知後覚」、実行家たる「不知不覚」に分けられると唱えた。これらの所説は著者によると、当時は一般的だったエルンスト・ヘッケル等の社会進化論と、ネルス・クェブリの「細胞の知性」論を結合させたもので、特に後者と同じく細胞を生命の基本単位としたのは、香港西医書院での顕微鏡を用いた学習体験に由来する。クェブリも孫文も専門的サイエンティストではなかったからこそ、狭義の科学の枠を越えて「包括的な知の体系を構想することができた」のであり、その所説は「科学の成果（と自らが受けとめたもの）を独自の生命観に集約させ、人間と知識を総合する」科学哲学と呼びうるものであるという。

「第二章　孫文と医学――『紅十字会救傷第一法』の翻訳と出

版」は、香港西医書院で「社会の学／文化の学という側面をも有する」医学を学んだ孫文の、卒業後における「医学的知識と経験を発揮した業績」として、英文救急医療書の翻訳を取り上げる。孫文が英国滞在中の一八九七年に翻訳・出版した『紅十字会救傷第一法』は、これまで言われてきたようなシンガポールや香港ではなくロンドンで製版・印刷されたもので、すでに恩師ジェームズ・カントリーから香港で救急医療を学んでいた孫文が、原著者サミュエル・オズボーンの強い意志により日本語版に次ぐ中国語版の訳者に選ばれた。救急法（ファースト・エイド）自体が当時は新しい概念・技術であり、平易な医療書の刊行は「医学のポピュラー・サイエンス化」の試みと評価しうるもので、また原著にない「紅十字」の語を孫文が同書に冠した背景として、当時の中国で赤十字組織の設立が求められていたことが指摘される。

「第三章　『実業計画』の同時代的位相――中国経済開発計画の背景とエンジニアたち」は、孫文が外国の資本・技術による中国の経済開発を提唱した著作である、英中両文版の『実業計画』の成立過程を跡づけ、パリ講和会議を契機とした対中新四国（米英仏日）借款団の成立という時代背景や、非現実的な「夢想家」といった欧米における消極的な評価を紹介する。他方、鉄道と海運の連関により中国内陸を国際経済に接続させるという構想が、米国公使ポール・ラインシュや北京政府交通部顧問ジョン・ベーカー、そして商務省特別委員でエンジニアのポール・ウィザムや工学生の許貫三と、共有されていたことが明らかにされる。応用科学の徒であった孫文は経済学と工学をも自らの科学の射程に加え入れ、公益の学としてのシヴィル・エンジニアリング（土木工学）の原義に即した、工学の書として『実業計画』を著したのだという。

「第四章　孫文と工学――「太平洋の時代」における上海港」は、孫文が『実業計画』で提唱した三つの港湾建設計画の一つである「東方大港」案は、「地図や数値データの利用、具体的な工法への言及など、その記述の細やかさ」を特徴とするものだという。そしてこの案は当時、列強の主導する浚浦局が提示していた上海築港計画を参照しつつも、「外国資本の手中にある上海に代わるべき中国経済の中心地を自らの手で創設しようとする愛国主義的なメッセージ」を含むものであると説く。そして、「自己存在の基盤となる地域の発展を図り、徐々にその範囲を拡大していい」くという、「内から外へ」のベクトルに基づいた張謇の水利事業に対して、孫文の視線は「外から内へ」向かうベクトル、つまり「世界地図上から俯瞰するように中国の現状を見すえ、国際的な門戸の一つとなるべき「東方大港」の位置を定め」た上で、「長江を遡りながら地域住民の生活にまで到達する」ものであったという。

「終章　近代科学思想と孫文」は、孫文が英文のポピュラー・サイエンス書籍から広範な科学知識を吸収していたこと、それらの書物を通じて新生気論や「生の哲学」（特にルドルフ・オイケンやアンリ・ベルクソン）を受容し、「国家の機能を「知る生元」「伝える生元」「働く生元」に分化させ、巨大な生命体の内的調和の実現を図る、一つの巧緻な戦略」を構想したこと、「科学と人生観」論争の参加者達のように哲学と科学を対立的に捉えるのではなく、「科学知識を統合した「総合科学」」として自己の哲学

を構築したことを説く。そして、孫文の「生の哲学」を継承し「世界全体へと「生命」の領域を拡大する」ことが、環境と人間の関係をめぐって「主客二元論にとらわれない東洋的思想の先駆性と重要性」が指摘される今日、「私たちすべてが引き受けるべき課題」であるという。

「補論　孫文と南方熊楠」は、「世界観の基底として彼らが共有した（あるいは共有しえなかった）「科学」の姿」を明らかにすべく、熊楠の米国におけるポピュラー・サイエンスとの接触や「東西の科学と思想の架橋」への関心、そして渡英後の知的越境の実践が孫文を触発した可能性（例えば『孫文学説』中のジガバチに関する記述）、孫文がハワイから熊楠に地衣標本を寄贈した逸話等が指摘される。

三

以下に本書に対する評者の所感を記そう。

まず一読して強く印象づけられるのは、孫文と関連のあるさまざまな周辺人物の事績を、著者が驚嘆すべき詳細さで追跡調査していることである。とりわけ注目に値するのは、英米人を中心に孫文が交流したり影響を受けたりした西洋人の経歴が、きわめて丹念に検証されていることだろう。その結果として本書の構成は、一八二頁の本文に対してその三分の一強の六七頁の注釈が付くというものになっている。例えば、その蔵書を孫文が購入したトマス・ジャーニガン、広州博済医院附設医学校の創設者であるジョン・カー、香港西医書院における恩師のパトリック・マンソンとジェームズ・カントリー、『ファー・イースタン・レビュー』誌の主宰者であったジョージ・リー、『実業計画』を積極的に評価したポール・ラインシュとジョン・ベーカー、孫文の「東方大港」計画に影響を与えたポール・ウィザム、『トランス・パシフィック』誌上で『実業計画』を紹介したB・フィッシャー、長江水利事業に従事したヨハニス・デ・レイケとアウグスト・フォン・ヘイデンスタム等である。これと関連して、香港西医書院や赤十字社・聖ヨハネ救護機構および浚浦局の設立過程や活動内容、さらには『ファー・イースタン・レビュー』や『トランス・パシフィック』といった雑誌の性質が、きわめて多様かつ広範な英語資料により詳細に解明されている。

これらの人物や機構の一部は従来も知られてはいたが、これほどまでに精査されたことは管見の限り少なく、また多くの人名は評者にとって全くの初耳だった。これらの膨大な情報が孫文思想の時代背景を理解する上で有用であり、また孫文と日本の関係に着目しがちであった日本の学界においては、開拓者的な意義を持つことも強調しておく必要があるだろう。

次に、孫文の科学をめぐる知識・情報の入力と出力、すなわち彼の科学思想の形成と表明の過程を、孫文の書籍購入・閲読歴や著作の成立過程のみならず、中国・西洋の科学史に関する知見までをも踏まえて、丹念に跡づけたことが指摘できる。例えば、『孫文学説』で提起された「生元」説の背景として、顕微鏡により観察される細胞への関心という共通点が、孫文とクェブリやヘッケルとの間にはあり、滞英中の『紅十字会救傷第一法』の翻訳・出版は、ヨーロッパからアジアへの救急医療の伝播・普及という、国際的な潮流の一端を成していたことが説かれている。ま

た、『実業計画』が決して従来考えられてきたような、革命運動低調期の消閑的な大言壮語や孤立した言説ではなく、むしろ当時の現実的な課題であった開発計画をめぐる言論状況と呼応しつつ、形成・発表・評価されたものだということも明らかになった。

そして、なんと言っても孫文の科学思想という本書の中心的論題が持つ斬新さは、やはり特筆に値しよう。無論、これまでも類似の課題を扱った研究がなかったわけではないものの、それらが概して「革命家たる孫文」の一側面として彼の科学観を取り上げていたのに対し、本書は孫文の革命運動とは明確に切り離して、彼の科学思想を検討対象としているのである。換言すれば、これまで多くの研究者が政治的目的に奉仕する（あるいは少なくともそれと関連する）限りにおいて、孫文の科学観に言及してきたのとは異なり、著者は孫文の革命運動に先行するものとして、まず彼の知的活動の産物たる科学観、つまりは彼の世界観の形成過程を描き出そうとしているかにも見える。これは、はたして孫文研究におけるコペルニクス的転回となりうるのであろうか。

四

書評の通例に倣って、ここで本書に対する評者の疑問点を述べねばならない。

あるいは単に評者が政治史研究者であるためかもしれないが、しかしやはり孫文の科学思想と革命運動との関係を知りたく思う。本書においては、「生元」論と「先知先覚」「後知後覚」「不知不覚」の三分法との関連や、『紅十字会救傷第一法』を東京民報社が再版したこと以外に、この課題をめぐる言及はほとんどない。無論、この問いは著者の設定した本書の検討範囲を越える、隴を得て蜀を望むものであろう。しかし、孫文が革命運動を開始する以前はもちろんのこと、それ以後においても貪欲に科学知識の吸収・消化に努め、それを自己の思想形成に活かしていったことは、本書が詳細に明らかにした通りだ。であるならば、革命運動と並行して行なわれた孫文の知的活動が、まったく非政治的なものだったとは考えにくい。この課題に取り組んだ先例としては、中村哲夫『孫文の経済学説試論』（法律文化社、一九九九年）が挙げられる。

なお、いささか大げさな「コペルニクス的転回」という比喩を用いたが、実は科学思想に限定するのでなければ、まず孫文の抱く思想体系（例えば哲学思想・政治思想等）の存在を前提として、その実現を目的としたのが彼の革命実践であったという、いわば流出論的な孫文像の描き方は過去にも行なわれたことがある。その最も極端なものは、かつて国民党「党義」の基礎として構築された、壮大な百科全書的「国父遺教」だろう。実は本書を一読して評者は、王昇（松田憲澄訳）『孫文思想』（市民書房、一九七八年）を思い起こした。本書は無論、孫文を偶像化・神格化する「党義」「遺教」とは異なるのだが、もっぱら彼の科学観（あるいは世界観）を検討対象としたため、そこには著者も言及している陳立夫の唯生論との類似性が生じている。単純化して言えば、ある体系化された世界観を抱く思想家が、それに合わせて演繹的に現実世界を改造すべく政治実践に取り組むという、宗教家・救世主的な孫文像に本書の議論がつながるように、評者には思われるのだ。

革命家が一定の思想体系を持つのは不自然であるどころか当然のことだが、孫文思想はストックよりもフローとしての性格が強いと、評者は考える。つまり、孫文の脳裏に体系化された網羅的世界観の存在を想定するよりも、千変万化する革命運動・政治状況下の様々な他者との接触・交渉の中で、その時々の必要に応じて不断に繰り返された言葉・情報の入出力、すなわちコミュニケーションの過程に評者は着目したい。無論、孫文の知的営為に一定の傾向・構造を見出すことには評者もやぶさかでないが、それは体系的世界観というような静態的・固定的なものではなく、むしろ柔軟かつ動態的な性格こそが孫文思想の最大の強みであり、時代を越えて意義を持ち続けているゆえんであろう。

そのような孫文思想の中で「科学」がどう位置づけられるのかは、まさに本書の問題提起を受けて評者自身も改めて考えるべき課題である。例えば、著者も指摘する「生元」論と国家有機体説の類似は、個人よりも国家・民族の自由を強調する「散沙」論との関連を想起させる。近代合理主義に批判的なベルクソン哲学への（間接的？）共感も、「西洋文明の限界」論が好まれる日本・中国に広く見られた現象であり、西洋民主主義体制の超克への志向とも響き合うものだったかもしれない。

このように重要な課題が本書によって提起されたのであるから、今後は新たな研究者が孫文をめぐる議論に参加することが強く望まれる。

（勁草書房、二〇一四年）